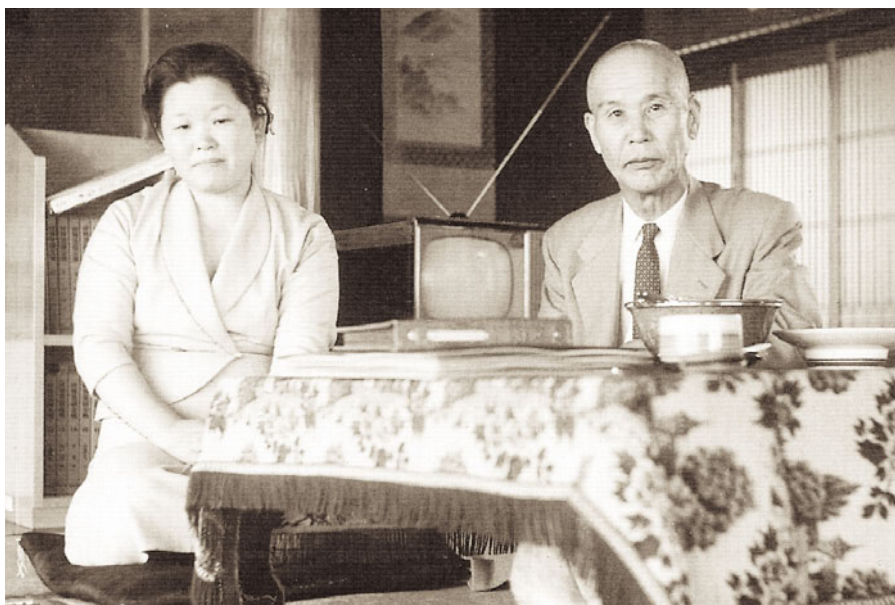


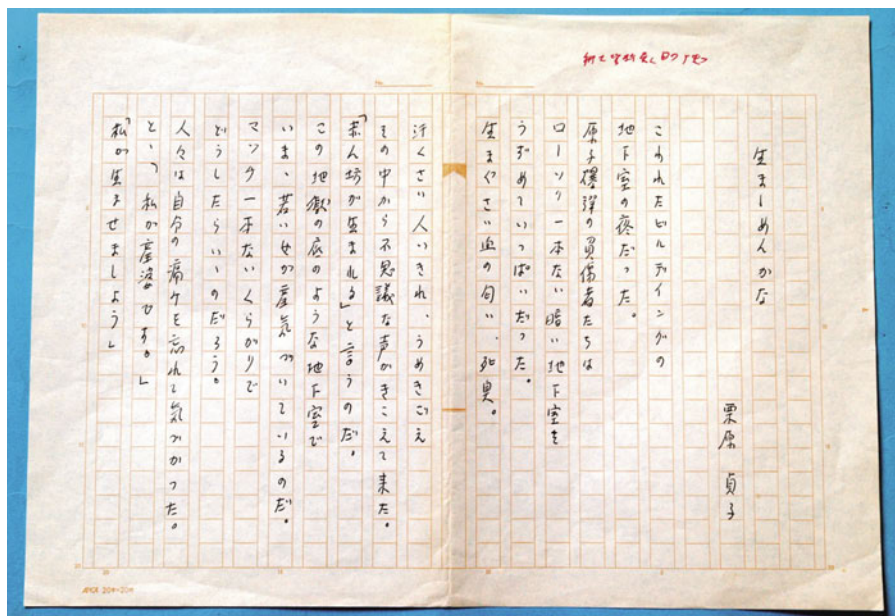
〔栗原貞子記念平和文庫〕開設記念

生まるゝかな





① 作家・細田民樹㊦と貞子㊤(60年6月 広島憩いの家で)



② 詩「生ましめんかな」の肉筆原稿(1枚目)  
栗原貞子にとって、この詩は詩人としての生き方を決定づけた





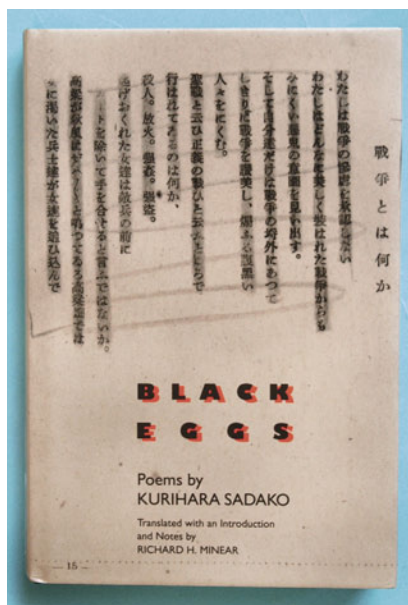
③ 「生ましめんかな」の一節をかけた「文庫」入り口



④ 文庫内には、蔵書(自著を含む)、雑誌を中心に展示されている



- ⑤ 戦後いち早く、作家・細田民樹を顧問に「中国文化連盟」を結成し、本格的に文化活動を開始(文化総合誌『中国文化』全18巻)



- ⑥ ㊦ 詩歌集『黒い卵』(46年8月)初版本。(検閲で詩3編、短歌11首が削除される)  
 ㊧ マイニア教授により英訳出版された『BLACK EGGS』(94年)





2008年、栗原貞子文学資料の学校法人広島女学院への寄贈を受け、資料整理に入った。特に覚え書きノート類4冊などから、未発表作品86編、既に発表されているが『栗原貞子全詩篇』（土曜美術社・2005年）未収録作品23編、合計109編、短歌15首を確認、翻刻（判読しにくい文字を読み解く）。今回、未発表作品のなかから41編を選び編集した。

# 生ましめんかな

## 〈栗原貞子記念平和文庫〉開設記念

### グラビア

発刊にあたって 黒瀬真一郎（広島女学院院長） 6

〈文庫〉開設について 今田寛（広島女学院大学学長） 8

栗原貞子宛リチャード・H・マイニア書簡抜粋 田中圭子 10

「黒色銀河」初出のあと 三宅圭子 24

---

### 生ましめんかな 35

#### 未発表作品

三瓶山 36 舞台 36 挫折 37 時間 38 暗  
らい海 39 蝶 39 こえ 40 雪の幻想 41 抗  
議船フェニックス号 42 死 43 戦争 43 橋 44  
石 45 秋 46 樹木 46 わたしたち 47 空  
48 黒い旅行鞆 49 失われた夏 50 浅春  
51 花幻の碑 52 それがあるから 53 黙示 54  
無数のわたしとあなた 55 呼びさまされる 55 女  
が夜叉になるとき 56 蝶になる日は 57 突出する  
もの 58 ことばを超えた世界のあなたに 59 碑  
60 雨 61 原爆断章（5編） 61 あなたの小さな  
手を 63 言って下さい ひとりのひとに 64 夕暮のよ  
うに萎えて 65 喪失か回復か 66 遠いこえ（一）  
66

---

\*未発表作品翻刻 伊藤真理子 \*表紙 「花幻の碑」草稿部分

\*グラビア②～⑦写真撮影 野地俊治

# 「栗原貞子記念平和文庫」開設記念 小冊子発刊にあたって

広島女学院院長 黒瀬真一郎

昨年七月、「生ましめんかな」「ヒロシマというとき」などの詩で広島を代表する詩人の一人・栗原貞子さんの貴重な資料、肉筆原稿、詩集、書簡や被爆翌年の四六年に栗原さんが編集・創刊された地域誌『中国文化』等段ボール箱一六〇箱、約五〇〇〇点が長女・栗原真理子さんから本学へ寄贈されました。

更に、八月には、新たに未発表分も含めて肉筆原稿一〇二点が見つかり、酷暑の中三ヶ月をかけて莫大な資料の分類、整理にあたり、一〇月七日開設式を行なう運びとなりました。

このたび、本学に「栗原貞子記念平和文庫」が開設されたことを記念するとともに、栗原文庫の開設意義を広く社会に周知させるために、小冊子を発刊することにいたしました。

ここで、本学への寄贈の申し出を受けるに至った経緯について紹介させていただきます。

昨年早春、「広島に文学館を！市民の会」代表・水島裕雅氏（広島大学名誉教授）と同事務局長の池田正彦

氏が来訪され、栗原貞子さんの原稿や書籍を長女・真理子さんの意向により広島女学院へ寄贈したい旨伝えられました。

広島出身の作家の中には、古くは江戸時代から現代にいたるまで頼山陽をはじめ文学界に大きな影響を与え、特に、原爆被災後の原民喜、峠三吉、大田洋子や栗原貞子をはじめとする原爆文学は国内外の人々に大きな影響を及ぼしました。私もかねてから他県に見られる文学館がここ広島にも早く建設されることを願っておりまして。申し出は本学にとつて大変有り難く名誉なことですが、ヒロシマを代表する女流詩人の諸文献・資料を一私学で所蔵するよりも、広島の貴重な財産として文学館が建設されるまで公の図書館で大切に保管し、広く市民の財産として公開・活用する方が良いのではないかと申しました。

五月、再来訪され、真理子さんが小学校時代、女学院への進学を考えておられたこと、本学が学院を挙げて永年にわたり女子教育、平和教育に熱心に取り組んでいること等を真理子さんが寄贈の理由とされました。「平和な社会を創造することを願望した母の思いを受け止めていただけたと思いました」真理子さんが寄贈記念式で語られたこの言葉を真摯に受け止め、広島歴史を語る上で欠かすことのできない資料として、学内外へ発信していきたいと願っています。

開設、小冊子発刊あたり特にお世話になりました栗原真理子さん、「広島に文学館を！市民の会」代表水島先生、「市民の会」幹事・成定薫（広島大学教授）様と会員の皆様、開設準備と小冊子編集にご尽力いただきました岡部哲博様、池田正彦様その他ご協力いただきました多くの方々から感謝申し上げます。



# 栗原貞子記念平和文庫開設について

広島女学院大学学長 今田 寛

二〇〇八年一〇月七日に、「栗原貞子記念平和文庫」が広島女学院大学図書館二階の一画に正式に開設され、広島が生んだ女性詩人・栗原貞子さんが残された全資料が本学で管理、活用されるようになりました。これは本学として大変光栄なことではありますが、同時に大きな社会的責任でもありますので、文庫の設置場所は大学図書館としますが、資料の寄贈は広島女学院全体としてお受けしようということになりました。そして現在は同文庫の管理運営は、黒瀬真一郎院長を委員長とする「栗原貞子記念平和文庫運営委員会」でなされております。

このような訳で、本文庫が本学に開設されるに到る経緯については黒瀬院長に委ねることにし、私は一〇月七日の文庫開設式典の折にお話した内容をお伝えし、ご挨拶に代えたいと思います。以下当日のご挨拶の概要です。

二ヶ月前、原爆の日を前にした七月二十八日、ご寄贈いただいた栗原真理子さんをお迎えして栗原貞子記念

平和文庫の仮オープンのセレモニーを行いました。その後資料の整理も進み、展示コーナーも完成し、今日一段落ついたところで再び栗原真理子さんをお迎えして正式の開設式をこのように開催するにいたしました。ご存知のように、この文庫は「平和」「女性」「文学」「広島」「戦後史」など、多くの側面をもつものですが、したがって今後各方面の方々に幅広く活用されることを期待していますが、大学としてなすべきことには次の三つの面があると思います。第一は学術研究面です。この面に関しては、今後本学の教員が中心になって他大学の先生方にも参加いただき、栗原貞子に関する学際的総合研究が展開されることを期待しています。そしてしかるべき研究補助金を得て資料目録を完成させ、それをデジタル化して世界に情報発信し、国内外の研究者の利用に供することができればと願っています。すでにポーランド、アメリカ、イタリアの大学院生・研究者が関心を示しています。第二は教育面ですが、内外の大学生・高校生の平和学習・研究に貢献できるように、わかりやすい資料の展示・紹介ができる教育的な体制を整備し、例えば本学の学生がボランティアで、来場者に対してこの文庫の説明・紹介ができるようになればと願っています。第三は社会貢献です。私共は広島が生んだ一女性詩人の全生涯の記録を丸ごといただきました。それは平和教育を大切にし、それ故に二〇〇六年には栄えある「谷本清平和賞」を受賞した女学院が、この全市民的財産ともいふべきこの貴重な資料一式の管理・運営を、市民の皆さんから託されたものと理解しております。今後市民の方々が有効に未永くご利用いただけるような体制を整え、責任をもってお世話させていただく所存です。

何卒、今後とも物心両面で、今日開設された文庫へのご支援をよろしく願います」

# 栗原貞子宛リチャード・H・マイニア書簡抜粋

田中 圭子

## 序

アメリカ人歴史学者リチャード・ホフマン・マイニア氏 (Richard Hoffman Minear 一九三八-) は、近代日本史学研究の分野で多大な業績を上げる一方で、栗原貞子 (一九一三-二〇〇五) の詩作を最も多く、まとまった形で解釈、英訳して作品研究の基盤的資料を整理するとともに、栗原その人との多年に渡る交流に基づき精緻かつ冷静な人物評を著した、近代日本文学、特に原爆文学の研究者でもある。後者の分野における研究成果は、栗原の代表作を補完・載録した詩集『黒い卵』完全版<sup>1</sup>を中心に編纂された栗原との共著『Black Eggs』<sup>2</sup>等の出版という形で大成され、(ペン)により核廃絶の実現を目指した栗原貞子の作品と人物の評価を、世界文学史上に一定のものとして留めたのである。

マイニア氏は、一九六四年にフルブライト奨学生として初めて日本を訪れ、京都大学大学院で法律学を専攻した。一九六六年に帰国してハーバード大学大学院に在籍し、二年間の課程を経て、一九六八年に同大学より博士号 (Ph.D.) を授与。この間、オハイオ州立大学で三年間講師も務めている。一九七〇年、フルブライト研究員として再来日を果たし、京都大学に二年間在籍して研究活動に邁進した。帰国後はマサチュー

セツツ大学アマースト校に歴史学専攻教授として着任し、現在も名誉教授として同校に所属している。

マイニア氏は、いわゆる東京裁判の法的解釈をめぐる研究において特に業績が高く、優れた著述を複数発表してきた。一九七二年に出版した『Victors' Justice: the Tokyo War Crimes Trial』<sup>ii</sup>では、東京裁判における判決の法的根拠を否定する立場を示したほか、いわゆるパール意見書の是非をめぐって家永三郎（一九一三—二〇〇二）と論を交わしている<sup>iii</sup>。第二次世界大戦中の日本軍の実態を題材にしたノン・フィクション作品の翻訳にも業績があり、作家・吉田満（一九二一—一九七九）の名著『戦艦大和ノ最期』<sup>iv</sup>を英訳した『Requiem for Battleship Yamato』<sup>v</sup>は好評を博している。近年は、家永の著述を英訳し、その人物を評した『Japan's Past, Japan's Future』<sup>vii</sup>のほか、第二次世界大戦中にアメリカ合衆国の新聞に掲載された風刺漫画の批評<sup>viii</sup>も手がけている。

広島女学院大学図書館栗原貞子記念平和文庫には、栗原へ宛てたマイニア氏の書簡や寄贈図書等が収蔵される。これらは、両者の交流の実際を伝える資料であって、特に書簡には、栗原との出会いのきっかけから、『Black Eggs』出版に至る経緯が記されており、栗原作品の享受史解明に不可欠な資料と言える。なお、書簡に記された両者の動向を、より具体的に把握するためには、同じく栗原貞子記念平和文庫に収蔵されるその他の人物による書簡の内容が参考となる。まず、詩人で元マサチューセツツ大学アマースト校図書館司書の副見恭子氏が栗原に宛てた書簡は、マイニア氏の依頼により栗原とのやりとりや作品の英訳を支援した人物による記述として重要である。また、愛媛大学教育学部体育学教授杉山允宏氏が一九九一年九月七日付で執筆した書簡ならびに同封のエッセイには、マイニア氏の関歴や『Black Eggs』出版直前の動向が詳しく記されていて参考になる。なお、このエッセイは、一九九一年八月二十九日（木）付け愛媛新聞に掲載された。杉山氏は広島県出身で、マイニア氏以前に栗原との共著の中で「生ましめんかな」を始めとする代表作を英訳していた<sup>ix</sup>。詩人で、「広島通信」編集者として栗原とも深く関わった大原三八雄（一九〇五—一九九二）の娘婿にあたり、一九九一年五月から翌二月まで、当時の文部省長期在外研究員としてマサチューセツツ大



学アマースト校へ留学している。杉山氏のエッセイによれば、氏は渡米してまもなくマイニア氏と出会い、同八月六日、アマーストと河川越しに隣接するノーザンプトンのスミス・カレッジで開催された原爆記念式典へ共に参加するなどして、親睦を深めたと云う。以上の書簡を始めとする関連資料の所蔵情報については、本稿文末所掲「栗原貞子記念平和文庫所蔵リチャード・H・マイニア関連文書一覧」を参照されたい。

歴史学、法学の専門家としてのマイニア氏が、栗原作品の英訳と研究に取り組みきっかけとなった一つは、栗原以外の原爆文学作家や詩人による作品との出会いであった。杉山氏のエッセイによれば、マイニア氏は、一九六四―六六年ならびに一九七〇―七一年、フルブライト奨学金を受けて京都大学に在籍した間、「原爆小説詩などに関心を寄せられ」、原民喜（一九〇五―一九五二）、大田洋子（一九〇三―一九六三）、峠三吉（一九一七―一九五七）の代表作を英訳し始めたと云う。これらの英訳のうち、一部は研究成果として論文発表<sup>※</sup>され、その他については一九九〇年発行の著書『Hiroshima: Three Witnesses』xiに掲載されている。また、前述の杉山氏の文書とマイニア氏の記憶によれば、スミス・カレッジにおける原爆記念式典において、杉山氏はマイニア氏の勧めで栗原詩作数編の日本語による朗読等を披露し、マイニア氏も自作の英訳を朗読したと云う。『Black Eggs』執筆前後の時期において、マイニア氏は、原爆の悲慘と東京裁判の不条理を引き起こしたアメリカを中心とする連合国側の戦争責任を究明した優れた研究者であると同時に、一人の平和主義者として核廃絶を祈念し、その実現のために真摯に活動した人物として評価されよう。

『Black Eggs』掲載のマイニア氏執筆序文によれば、氏と栗原との出会いは、一九八三年に、大田洋子の親族と面会するため初めて広島を訪れた時のことであつたと云う。前掲の杉山氏書簡にも、マイニア氏と栗原との交流が「八年前（一九八三）」に始まったとされる。栗原貞子記念平和文庫に残るマイニア氏書簡は、日付の明らかでない、恐らくは出会いから数年後に送られたものか、一九八五年以降の日付によるものに限られるが、それらの内容には、出会いの時期の交流について、断片的にはあるが具体的に伝える記述が散見する。

一九八六年二月十三日付でマイニア氏から栗原に送られた書簡には、氏が、ある原爆文学作品の英訳出版許可をめぐる作家の遺族との交渉に際し、栗原の助力を得て成功させたと記されている。また、同じ書簡には、これ以前に栗原がマイニア氏に自作の詩やエッセイのコピーを大量に送り届け、マイニア氏がそれらの英訳に着手したこと、英訳に際して詩の文言を慎重に検討し、不明な点については栗原に直接質問して教示を求めたことなども記されている。マイニア氏は、栗原の作意と作品の魅力を最大限に反映させるべく、努力していたものと推察される。

『Black Eggs』序文において、栗原は、日本の高度経済成長を機に再び悪化した日米両国間の国民感情が、同書の出版を機に改善されることを祈念していた。栗原は、〈原爆〉を開発して広島・長崎に投下したアメリカ合衆国の国民たるマイニア氏に対して、遺恨に満ちた言動に及ぶようなことは決して無く、出会いの当初から氏の研究活動に助力し、代表作の英訳出版まで託した。栗原は、氏のそれまでの優れた業績とともに、原爆文学への純粋な関心、真摯な研究姿勢を評価したのであろう。また、代表作の内容と情趣が、より確かな英語力の持ち主により英訳されることで、〈原爆〉の悲惨さと核の危険性が合衆国を始めとする英語圏の国々に暮らす人々に、より確実に、深刻なものとして伝わり、被爆者への理解と哀悼の意が芽生え、核を懸念する声の高まることを、期待したに違いない。

本稿は、栗原とマイニア氏が、『Black Eggs』出版という形で結実させた文芸による平和活動の、いわば〈芽吹き〉の時期における交流の一端を明らかにする目的で、前述の一九八六年二月十三日付け書簡の全文を和訳して掲載し、日本近代文学史研究資料として供すものである。なお、本稿への和訳の掲載は、広島女学院大学図書館とマイニア氏の許諾の下に行っている。今後は、氏のその他の書簡についても、氏の意向を仰ぎながら研究資料として整理したいと考えている。

- i 『黒い卵 占領下検閲と反戦・原爆詩歌集 完全版』 人文書院、一九八三年
- ii ミシガン大学出版 一九九四年
- iii プリンストン大学出版 一九七一年（初版）、『勝者の裁き 戦争裁判・戦争責任とは何か』 安藤仁介訳 福村出版 一九七二年（和訳初版）
- iv 東京裁判のラダ・ビノード・パール判事が被告全員の無罪を主張した意見書（パール意見書／パール判決書）の妥当性について、パールの死の翌年に家永三郎が「十五年戦争とパール判決書」（『みず』一九六七年一月号）を著して批判したことに対し、マイニアは「パール判決の意義・家永教授への反論」（『みず』一九七五年一月号）等の中で意見書を擁護する立場を示している。
- v 東京創元社 一九五二（初版）
- vi ワシントン大学出版 一九八五年（初版）、講談社インターナショナル 同年（再版）
- vii 『Japan's Past, Japan's Future: One Historian's Odyssey』 家永三郎著 マイニア訳 Rowman & Littlefield Publisher 二〇〇〇年
- viii 『Dr. Seuss goes to war: The world war II editorial cartoons of Theodor Seuss Geisel』 The New Press 一九九九年（初版）
- ix 『The Song of Hiroshima AN ANTHOLOGY? 広島のうちた』 さつき出版 一九七九年 『The Song of Hiroshima--WHEN HIROSHIMA IS SPOKEN OF--』 詩集刊行の会 一九八〇年（初版）  
『反核詩画集広島』 詩集刊行の会 吉野誠画 一九八五年
- x 『Hara Tamiki's Land of my Heart's Desire』 Area Studies Program, University of Massachusetts at Amherst（マサチューセッツ大学アマースト校国際地域研究プログラム）研究成果発表 一九八九年
- xi プリンストン大学出版 一九九〇年

## 凡 例

本稿は、広島女学院大学図書館栗原貞子記念平和文庫所蔵（一九八六年二月十三日付栗原貞子宛リチャード・H・マイニア書簡）の全文を和訳し、適宜注記を加えたものである。書簡の原本は便箋ともども広島女学院大学へ寄贈される以前に散逸したらしく、ゼロックス・コピー一部が残存することから、本稿ではこのコピーを底本に和訳して適宜注記を補った。和訳、注記のそれぞれは以下の原則に則って行った。

### ・ 和 訳

- 一、用字、書体には、一九八六年当時ではなく現在通行のものをを用いた。
- 一、文体には、適宜通行の敬語表現を用いた。
- 一、作品名等の固有名詞は、原文に引用符が使用されない場合であっても、各種鍵括弧（「」、『』）を適宜補って示した。

### ・ 注 記

- 一、内容の把握に注記を要すると判断された文言に対しては、和訳の該当箇所に算用数字で通し番号を付し、脚注欄に順次概説した。この時、注の標目には、和訳で使用した文言を冒頭に配し、続けて丸括弧内にその原文を示して使用した。



1986年2月13日

親愛なる栗原さん、

前回お手紙を差し上げてから、しばらくご無沙汰しました。お元気でいらつしやることを願います。ここアマースト―では、月の大半に積雪があり、大変冷えます。しかし、日照時間は徐々に長くなっています。

前回お手紙を差し上げてから、多くの出来事がありました。私が訳した『戦艦大和ノ最期』の英訳版がアメリカ（ワシントン大学出版）と日本（講談社インターナショナル）の両国で出版されました。別便でコピーをお送りします。

「夏の花」の訳は完成しましたので、すぐに出版社を探すつもりです（原の「心願の国」も翻訳しました。「屍の街」の訳も、まもなく完成します。この二週間は、あなたの詩を読み、その一部分を翻訳して過しました。まずは、あなたの詩とエッセイをたくさんお届けくださりましたことに、感謝申し上げます。次にあなたの詩のうち二篇を訳したものの原稿を同封しましたのでお知らせします。既存の英訳よりも詩的に仕上がったものと自負しています。ご賛同いただけるようでしたら、私の翻訳を出版・掲載することにお許しを賜りたく、お願い申し上げます。ご存知のとおり、私は広島文学についての本の執筆中で、書中にはあなたとあなたの詩に関する章を設けています。この章では、あなたの詩を広範囲に渡って引用したいと考えています。詩の掲載・出版ということでは、他の可能性もあろうかと考えます（例えば雑誌や新聞への掲載も検討中です）。どのような場合であれ、執筆料は受け取りません（本の印税は別として）。

あなたの詩の翻訳を出版・掲載することをご承諾いただけるようでしたら、同封しました許可状にサインを頂戴したく、お願い申し上げます。

あなたにお尋ねしたいことが幾つかあります（後々もつとお尋ねすることになろうかと思えます）。

1 あなたの「旗」<sup>1</sup>という詩の中に、辞書類には見当たらない表現<sup>2</sup>が一つあります。恐らくは中国の場所の名前ででしょうか？お助けいただけますか。

2 ビキニに関するあなたの詩（「アメリカは何でも世界で一番」<sup>3</sup>）の中で、レコヂ<sup>4</sup>少年と彼の両親についてふれておられますが、彼らの名前のローマ字表記はご存知でしょうか？（誤植についてはお知らせすることがたくさんあります。たとえば、「ヒロシマの歌」<sup>5</sup>に Longetup 島とありますが、正しくは Rongelap<sup>6</sup>かと考えます。

3 あなたは大田洋子<sup>7</sup>と彼女の著述についてよくお書きになっています（私は、あなたが大田洋子についてお書きになったご趣旨のほとんどに賛同しています）。ですが、原民喜<sup>8</sup>についてお書きになったものはほとんど見当たりません。どうしてですか？峠三吉<sup>9</sup>については何かお書きになったことがおありですか？

4 丸木夫妻<sup>10</sup>と彼らの原爆の絵についてお書きになったことはありますか？東京近郊の美術館<sup>11</sup>にはお出かけになったことがありますか？

これまで何年もの間、私は、既に亡くなっていた人々…吉田、大田、原らの作品を翻訳し続けて来ました。著者ご自身にお便りで質問を差し上げるといのは、これまでに経験したことがありますでした。

改めまして、あなたの全てのご助力に感謝申し上げます。

(結 語)  
(自 署)

リチャード・H・マイニア

191 ローリンググリッジロード

アマースト、マサチューセッツ 0100218

1 アマースト (Amherst) アメリカ合衆国マサチューセッツ州。1986年当時、マイニアはマサチューセッツ大学アマースト校に歴史学教授として勤務。現在は名誉教授として同校に在籍。

2 『戦艦大和ノ最期』(Senkan Yamato no saigo) 吉田満(小説家、1923-1979)著の小説。1952年に創元社より出版され、1974年に北洋社版が刊行された後、1981年に講談社版も刊行されて版を重ねる。『吉田満著作集』上巻(文芸春秋社、上下巻、1986年)にも載録。マイニアによる英訳版は“Requiem for Battleship Yamato”と題して1985年にワシントン大学出版、講談社インターナショナルより日米同時出版がなされた。

3 「夏の花」(Natsu no hana) 原民喜(詩人・小説家、1905-1951)著、随想。『三田文学』1947年6月号に掲載され、のちに『夏の花心願の国』(新潮文庫、1973年)、『原民喜』(シリーズ人間図書館…作家の自伝…71、川津誠編、日本図書センター、1988年)、『何とも知れない未来に』(小説集、大江健三郎選、集英社、1983年)等に載録。マイニアによる英訳版は、“Hiroshima: Three Witnesses”(プリンストン大学出版、1990年)に掲載。

4 「心願の国」 ("Shingan no kuni") 原民喜(前注参照)著、随想。『群像』1951年5月号に掲載され、のちに『夏の花 心願の国』(前注参照)、『定本原民喜全集Ⅱ』(青土社、1978年)『日本の原爆文学1』(ほるぶ出版、1983年)等に載録。マイニアによる英訳版は、"Hara Tamiki's Land of my heart's desire"と題し、マサチューセッツ大学アマースト校国際地域研究プログラム (Area Studies Program, University of Massachusetts at Amherst) 研究成果として1989年に発表。

5 「屍の街」 (Shikabane no machi) 大田洋子(詩人・小説家、1903—1963)著、小説。1948年に中央公論社より発行。のち『大田洋子集』第1巻(三一書房、1982年、復刻版)・日本図書センター、2002年に載録。マイニアによる英訳版は "Hiroshima: Three Witnesses" (プリンストン大学出版、1990年)に掲載。

6 広島文学についての本 (a book on Hiroshima bungaku) この構想は後に縮小され、"Hiroshima: Three Witnesses"として実現された。マイニア自身は本年4月の稿者宛て電子メールの中で、計画縮小の経緯と、後に "Black Eggs" 出版を果たしたこととの関係について、次のように記している。

You might note (about the third para in my letter) that I never wrote "a book on Hiroshima bungaku." That must have been my intent where I wrote this letter, but between 1986 and, probably, 1989 (I think that was when Princeton University Press accepted my manuscript), my thinking changed. The result was Hiroshima: Three Witnesses? without works of Kurihara, and 95% translation. It's strange reading my letter now, I'd forgotten that I ever intended to do a book about Hiroshima bungaku. I'm glad that I decided to do Hiroshima: Three Witnesses instead. If I had included Kurihara's poetry, then I would not have done Black Eggs.

7 「旗」 (Hata) 詩集『私は広島を証言する』(詩集刊行の会、1967年)載録の「旗(二)」。マイニアによる英訳版は、『黒い卵 (完全版)』載録詩集を中心に栗原が再編しマイニアが翻訳を担当した "Black Eggs" (University of Michigan Press, 1994) に載録。

8 辞書類には見当たらない表現 (a phrase that I cannot find in dictionaries) 栗原文庫所蔵の書簡コピーの該当箇所左余



白に「万人坑」（まんにんこう）との書入あり。前注所掲の詩「旗（二）」に「万人坑」の文言が見える。

- 9 アメリカは何でも世界一番 (America: Number One in Everything) 副題「一ビキニに寄せて」。大原三八雄による栗原代表作の英訳版にエスペラント語訳2篇を合装した「The Song of Hiroshima — WHEN HIROSHIMA IS SPOKEN OF」(詩集刊行の会、1980年4月、6月、1981年1月印刷・発行)に「AMERICA COMES OUT AS THE WORLD, STOP IN ANYTHING」の英訳題で掲載され、のちに『反核詩画集広島』(栗原貞子詩、吉野誠画、1985年発行)、『栗原貞子全詩篇』(土曜美術社出版販売、2005年発行)に載録。「The Song of Hiroshima」は、大原三八雄翻訳・編集『The Song of Hiroshima AN ANTHOLOGY — 広島のうちたー』(さつき出版、1979年発行)載録の栗原詩2篇の英訳版に、その他自作詩篇の英訳版ならびにエスペラント語訳版を合せた再編本。

- 10 レコヂ (Rekoji) レコヂ・アンジャイン (1953—1972)。1946年7月以降、66回に及ぶアメリカのビキニ水爆実験で被爆し、若くして亡くなったロンゲラップ島の住民。『反核詩画集広島』(前注所掲)に「レコヂ」のち『栗原貞子全詩篇』(前注所掲)では「レコジ」と改訂。

- 11 「広島之歌」("The Songs of Hiroshima") 注9所掲の再編本。

- 12 ロンゲラップ (Rongelap) ロンゲラップ島 (Rongelap Island)。

- 13 注5参照。

- 14 注3参照。

- 15 峠三吉 (Toge Sankichi) 詩人、1917年生、1957年没。第二次大戦前より詩や和歌などの創作を開始。28歳の時広島で被爆し、以後は原爆の悲惨さと反戦とを訴える詩作を数多く発表。代表作に、著書『原爆詩集』(青木出版、1952年発行)冒頭に「序」と題して載録され、世に「にんげんをかえせ」と呼び慣らされる詩篇がある。注3所掲の「Hiroshima: Three Witnesses」にはマイニアによる『原爆詩集』英訳も掲載されている。

- 16 丸木夫妻 (the Marukis) 画家で絵本作家の丸木位里 (1901—195)・俊 (1912—2000) 夫妻。代表作に、全15部から成る「原爆の図」(財団法人原爆の図丸木美術館所蔵)など。マイニアは、注3所掲の著書「Hiroshima:

- Three Witnesses”の装丁に、丸木夫妻の作品数点を使用している。
- 17 東京近郊の美術館 (the museum near Tokyo) 財団法人原爆の図丸木美術館 (埼玉県、1967年開館)。丸木夫妻の絵画を中心に収蔵、展示。
- 18 マイニアの所属機関であるマサチューセッツ大学アマースト校の所在地。

---

### 田中圭子 (たなか・けいこ)

広島女学院大学大学院言語文化研究科日本語文化専攻 博士後期課程単位取得満期退学博士 (文学)

共著『源氏物語』と王朝の教養』『薫りの源氏物語』

論文「伊井直弼と三條家薫物秘説との関係について」「平忠盛家の薫物と「香之書」」など

現在 広島女学院大学非常勤講師、広島女学院大学総合研究所職員

## 栗原貞子記念平和文庫所蔵リチャード・H・マインニア関連文書一覧

2009年5月1日現在

一、広島女学院大学図書館栗原貞子記念平和文庫に収蔵される、リチャード・H・マインニア氏による書籍や論文、図書等の書誌・所蔵情報を集約し、書目本文書の形態ごとに「書籍」「論文」「図書」「その他」の四種類に分け、年代ならびに書目のアルファベット順に並べた。

一、「書籍」には識別可能な名目が付されているため、稿者が執筆しないし発送の日付、執筆者名、宛名、形態等により便宜的に付した。

文書形態	資料名／書目／論文題目	著出人／著者等	発行者／綴録誌	発行／執筆年	所蔵館請求記号
書籍	1985年3月15日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1985	-
	1988年8月6日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1988	-
	1990年2月5日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1990	-
	1990年8月6日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1990	-
	1990年8月7日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1990	-
	1991年11月26日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1991	-
	1992年5月29日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1992	-
	1992年7月2日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1992	-
	1992年7月27日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1992	-
	1992年8月7日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1992	-
	1992年9月9日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1992	-
	1992年10月16日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1992	-
	1992年12月22日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1992	-
	1993年6月24日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1993	-
	1993年11月22日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1993	-
	1994年8月5日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1994	-
	1994年9月13日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1994	-
	1997年12月12日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1997	-
	1998年8月31日付栗原貞子宛リチャード ドH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	1998	-
	年月日未詳栗原貞子宛リチャードH. マインニア書簡	Richard H. Minear	-	-	-
	1985年5月14日付栗原貞子宛副見恭子 書簡	副見 恭子	-	1985	-

論 文	Hara Tamiki's Land of my heart's desire	The literature of Auschwitz and Hiroshima : thoughts on reading Lawrence Langer's 'The holocaust and the Holocaust: immolation'	Requiem for Battleship Yamato	Hiroshima : three witnesses	Black Eggs: Michigan monograph series in Japanese studies ; no. 12	Through Japanese eyes	When we say 'Hiroshima' : selected poems : Michigan monograph series in Japanese studies	その他	1991年10月8日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1991	-
									1992年7月6日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1992	-
									1992年10月3日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1992	-
									1994年12月12日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1994	-
									1995年2月11日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1995	-
									1995年3月28日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1995	-
									1996年1月1日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1996	-
									1998年1月8日付栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	1998	-
									年月日未詳栗原貞子宛副見恭子書簡	副見 恭子	-	-	-
									1991年9月7日付栗原貞子宛杉山允宏書簡	杉山 允宏	-	1991	-
図 書	Hara Tamiki's Land of my heart's desire	The literature of Auschwitz and Hiroshima : thoughts on reading Lawrence Langer's 'The holocaust and the Holocaust: immolation'	Requiem for Battleship Yamato	Hiroshima : three witnesses	Black Eggs: Michigan monograph series in Japanese studies ; no. 12	Through Japanese eyes	When we say 'Hiroshima' : selected poems : Michigan monograph series in Japanese studies	その他	Yoshida Mitsuru : translation and an introduction by Richard Minear	Hara Tamiki: a translation and commentary by Richard H. Minear	International Area Studies Program, University of Massachusetts at Amherst; Occasional	1989	913.6/Har: 226754
									Kurihara Sadako : translated and with an introduction by Richard H. Minear		Holocaust and Genocide Studies, V7 N1	1993	904/Kur: 226712
									Poems by Kurihara Sadako : translated in English with an introduction and notes by Richard H. Minear		Kodansha International	1985	913.6/Yos: 226722
									Hara Tamiki: Oka Yoko 'Toge Sanichi': edited and translated by Richard H. Minear		Princeton University Press	1990	911.5/Mi: 226723
											University of Michigan Press	1994	911.56/Kur: 226713
									Richard H. Minear : Leon E. Clark, general editor		Center for International Training and Education	1994	302.1/Mi: 226706
											Center for Japanese Studies, the University of Michigan	1999	911.56/Kur: 226753
											Hiroshima : Three Witnesses 書中に貼付	1992	-

## 「黒色銀河」初出のあと

三宅 圭子

栗原貞子さんが生涯を通じて反戦、平和活動をおこなってきた広島を代表する女流詩人であることはよく知られている。その代表作「生ましめんかな」「黒い卵」「ヒロシマというとき」など目にすることも多い。正確な年譜も存在する。これら詩や平和活動を契機にして我々が習知してきたことにさらなる厚みを持たせ、栗原さんを知らない世代にひらいていくことが出来ればと思う。

これは、私自身が少なからず文学に携わる者として、また、それ以前にも文学に支えられ救われた経験を持つ者として常日ごろ思うところである。文学がごく限られたひとたちのものではなく、より多くの人にとって馴染みあるものにするにはどのようなようにすればよいのか。何らかの形で文学にかかわりを持つ者たちの課題ではないだろうか。必ずしも発信方法ばかりではなく、視線を移動させることも必要なのではないかと考えている。栗原貞子さんの場合も、あまりにも定着している「詩」「平和活動」などのイメージと最初から結びつけるのではなく、一個人としてのひとつの素顔に視線を移してみるのである。どの時代、あらゆる世代のひとたちにも共通する「生きる」という生活人の目線に立つて栗原さんを見直すことで、文学に親しみを持たないひとたち、あるいは、平和活動など縁遠いものと捉えている若いひとたちにも栗原さんの精神が啓かれ継承されていくのではないだろうか。いくつかの問題点を考えた。

一、「詩」が文学の中でもとりわけ敬遠されがちな分野であること。

二、栗原さんに「平和」「反戦」などのイメージが強力に定着しているために、広島に縁の深くない人たち、あるい

は戦争を遠いものと捉えているひとたちにとつてはかえって親しみにくいものになっているのではないか。  
三、敗戦の後、飢餓、廃墟の中で歯を食いしばって生き抜いてきた女性が訴え続けた「平和」の意味が、生まれたときから全てが備わっているような現代人に理解されにくいこと

四、また、一に関連し、商業的な視点になるが、紙媒体として書店に置く場合、在庫の維持という現実問題が生じるため、結果として詩を遠ざけることにもつながるのではないか。

などがあげられる。

栗原さんのどの部分にどの角度からスポットを当ててどのように照らしていくかということを考えたい。  
現在、広島女学院大学では資料にデジタル画像処理が施され、全てを閲覧可能にするという作業が進行中である。完成すれば、文献の提供や最新の研究動向に迅速に対応していくことができるだろう。この機会にぜひ、あらゆる角度から栗原さんの新たな魅力を発見し、現在、未来への架け橋になればと願う。個人的には詩、平和活動以外のところでの人たちの交流からアプローチを試みたいと考える。そこからたどり着くところが文学であつたり、詩であつたり、平和活動や反核への思考となれば嬉しく思う。今回は、詩、平和活動を通じての交流に触れることになるが、現存する書簡から伺い知ることのできる栗原さんの交友に関する「怒り」に触れてみたい。

明治末期から大正初期にかけて中国地方の農村で二人の女の子が産声をあげた。のちに日本を代表する詩人となる栗原貞子さんと永瀬清子さんである。貞子は清子よりも六つ歳若い。大正二年三月四日広島県可部の農家に生まれ一生を広島で過している。清子は明治三十九年二月十七日岡山県赤磐郡豊田村松木にて大地主の家に生まれ、父の転勤に伴い二歳の時に金沢へ、十六歳の時に名古屋へ転居している。それぞれに女学校を卒業し、結婚し家庭を持った。貞子の結婚相手栗原唯一はアナキストであつたために、貞子は結婚を

親に反対され十八の歳に駆け落ちをしている。一方、清子は十八歳のときに弟誠一が急逝したために、永瀬家の法定相続人となっていた。二十一歳のとき家のために親の決めた結婚をしている。相手の男性は帝國大學を卒業し、明治生命に勤務していた長船越夫である。結婚後すぐに夫の勤務地であった大阪に住む。その後、夫の転勤に伴って東京で十五年を過した後、四十歳のとき、生まれ故郷の熊山（現在の岡山県赤磐市熊山町）に戻っている。

貞子と清子はのちに詩、平和活動を通じて交流を持つようになる。清子が主宰していた詩誌「黄薔薇」にも一時期、同人として参加していた。58号（昭和41年5月1日）には「月見草」を、59号（昭和41年11月20日）には「鎮魂歌」を発表している。61号では「栗原貞子詩集『私は広島を証言する』」の「紙上出版記念会」が行われているほか、詩集から「黒色銀河」が発表され初出となっている。

現存する書簡からふたりは昭和四十一年頃から四十三年時期盛んに交流を持っていたことが伺える。きっかけのひとつに、清子が国際連邦岡山県協議会事務局に勤務をしていたことで、広島での平和会議などに出席する機会が増えたことなどが挙げられるであろう。清子是一九四五年（平成7年）89歳の誕生日に、貞子はその十年後に九十二歳で息を引き取った。互いに、昭和、平成の時代を、仕事を持つ女性として社会での地位を築き、家庭の主婦として自己犠牲もいとわず家事に育児に全力を注いだ生涯であった。

反戦、平和主義に貫かれた貞子の作品を読むと、故郷であり、生涯を通じて生活圏であった広島への想いが伝わってくる。それだけに、作品一つひとつに命が漲っているように感じられる。作品を「黄薔薇」に掲載した際の何らかの手違いによって清子に対して貞子が怒りをぶつけた出来事をうかがい知ることのできる書簡が残っている。

旅行から帰って貴方のおはきを拝見本当におどろきました。貴方は私を「よほど図太い神経なのか悪意なのか」と書いておいでなさる。私としては貴方に対して尊敬と友情のほか何もありませんでした。

もしそんなに悪意のわたしだったら貴方の御本の広告をわざわざのせたりするでしょうか。

でも私はどうしてそんなことになったのかつきとめて、おわびしなければならぬものならいさぎよくおわびし偶然の何かであれば貴方にもきいていただきたいと思いつくお返事しなかつたのですが

私がすぐおたよりしなかつたことでお腹立ちを増していられるかとも思いつくが私も本当に暗い思いでした。旅行に出る前の日に出来てきたので、同人の一人にいそいで同人の方々にのみはつそうするよう云い置いて旅行に出ました

帰ってから疲れと忙しさのため、また一般への発送は出来ずに机の下に積んだままになって居ります。

もし原因とも云う一番大きなものは私のこうした忙しさと疲れそのものかもしれません。

又、今年はどうしても年間に三回か四回は出したいとみんなで云っていたためいそいで二月に印刷にまわしたのです。それがいつものように仲々印刷が出来て来ないため何度もさがしていましたが年度の変わりめのため、もうすぐと云いながらのびていました。

三月一日に貴方にお逢いした時もその事申したいと思います。私は貴方からその時いただいた原稿をとりかへようかとも思いましたが、そでにまとめて活字をひろつてをくようたのんでいるのに原稿をとりかへたりすれば一層 びくと思つてそのまゝにしました。

貴方の原稿については同封のとおりのものでした。私は61号に出したのとちがう原稿だと思つていたのです。どうして61号にのせたもの以外にこの原稿があつたのか、よく判りません。

印刷がすんだらいつもすぐに印刷書ですてゝしまうのですが61号のはすててもうありません。

62号のあとの校正の分だけ藤原さんのところでさがしてもらつたらめづらしく同封のがのこつていました。今日やつともつてきてくれました。

若い人やはじめての人の場合とちがい、貴方の原稿を十分よまずにいたことになりませんが一、二、三連略すところのを私は「黒色銀河」のついきをかい下さつたものと解釈し、それだけ信用して編集しくり入れの



せたのですが、若い人のは、私がなをしたり、けづつたりすることも勿論あります、でも貴方のは、そんなことしようとも思いませんし、それだけに短い時間で切ばつまつて編集をしたのです。

だから私が一存で短くしたのではないことだけはたしかです。

又旅行に出る寸前になつて校正が出来てきたのでこんどにかぎり人にみてもらいました。

いろいろの思いちがいが偶然がかさなつて一緒に編集した藤原さんも私と同じように思つていたわけです。

貴方からハガキが来て私は自分の粗 については実になしく思っています

片瀬さんも新しい原稿がもしなければ詩集の中の一編をのせますからと申しましたがギリギリに送つてくれましたのでのせました。

貴方のを貴方の詩集からえらぶなら、私は勿論他の作品をのせると思います。61号にすでにのせていますから。所がこのような原稿があつたためにこうしたことが出来ました。勿論私がわるい点は沢山あります。そんな微力の私が詩の同人誌を出すべきではないとおっしゃるなら、それもご尤もだと思います。でも「悪意 ずぶとい」そうしたことだけは私には意外でした。貴方がそんなことをおっしゃるとは。

貴方がそんな私であるといまも思つていらつしやるのでしたら本当に悲しいことです。

人間は理解出来ないものかもしれません。

私は信頼をえることがなければと考えていたのですが。

ただ私がをろそかであつたことについてはおわびいたします。

これは、「黄薔薇62号」発刊直後に貞子から寄せられた抗議の手紙に清子が返信したものとと思われる。昭和四十三年五月十四日付けになっている。

つぎに、ここで問題の発端となつたと思われる「黒色銀河」61号発表のものと62号発表のものを順にみてみたい。

## 黒色銀河

栗原貞子

胡粉のように黒い星があつまる  
黒色銀河。

黒い渦に似た死者の大群が  
消え去らぬ残像となつて  
ゆっくり動く黒い影。  
けれどまだ右の眼は健在だ。

佐世保の詩人

矢動丸さんは原潜基地に  
黒い虹がかかっているのを見た  
証言した。

昨日

医療品を積んで北ベトナムに  
行くヨット・フエニックス号が  
広島港を出航した。  
波間にゆれ

ローリングする浮棧橋から  
私たちは

まるで週末旅行にでかけるように  
ごきげんな若ものたちを見送った

あかるい空

あかるい海

その果に、ナパームで焼かれた

ベトナムがあるとは嘘のような話だ。

黄金伝説の王のように

その手がふれるとどこでも

風景は黒くなり

黒い虹が立つ。

黒い虹の立つ国へ

週末旅行のように出かけた

若ものたちは

ベンハイ河にかかるベトナム人の血で染った真紅の虹を  
見るだろう

胡粉のように黒い星があつまる

黒色銀河

薄明をつげる明星のように

若ものたちは爽やかに出発した。

「黄薔薇61号」昭和四十二年十一月

この後、頻繁に葉書での交流が行われている。年明け一月十八日、一月二十四日、二月十九日、三月一日、なお三月九日の書簡によると清子が「世界連邦中四国協議会結成大会」で広島を訪れた際にふたりは直接会っていることがわかる。四月七日、四月二十三日と書簡のやりとりがなされている。現段階では、清子側には貞子からの書簡が残っていないこともあり、あくまでも貞子側に保管されている清子からの内容になるのではなるが、貞子が黄薔薇62号の発行を心待ちにしていた様子も伝わってくる。また平和活動、創作以外に、家族のこと、体の具合についてなどが記されていることから、互いが一人として接している素顔を垣間見ることができる。

このあと、貞子が清子に対して「図太い、悪意」と向けた「黄薔薇62号」発行となる。昭和四十三年五月一日発行「黒色銀河」である。

黒色銀河

栗原貞子

あかるい空

あかるい海

ナパーム弾でやかれた

ベトナムがあるとは

嘘のような話だ

黄金伝説のように

風景は黒くなり

黒い虹がかかる

黒い虹のかかる国に

週末旅行のように出かけた

若ものたちは

ベンハイ河にかゝるベトナム人の

血で染まつた真紅の虹を見るだろう

胡粉のように黒い星があつまる

黒色銀河

ゆっくり動く黒い残像

けれど、まだ左の眼は健在だ

〔黄薔薇62号〕 昭和四十三年五月一日

事実はどうであつたのだろう。①黄薔薇62号を慌てて編集していた頃、貞子の原稿が届かないのもうひとりの編集人と「このまま栗原さんの原稿が届かなければ、栗原さんの詩集から一篇を載せましょうか」と話し合う↓②栗原から原稿が届く。

ここで問題なのは栗原さんから「ギリギリに届いた」原稿の内容である。先に引用した五月十四日付けの書簡では清子が貞子の怒りに対して一方的に謝罪している。「内容を読まずにいた」こと、編集人としての確認不足を詫びているのである。栗原さんからの原稿の内容が62号に発表された通りのものであつた可能性はないのだろうか。いずれにしても、双方のどこかに手違いが生じたのである。↓③清子は61号「黒色銀河」の追記だと判断し、作品を読まずに62号編集を進める。↓④62号完成。↓⑤「悪意、ずぶとい」と記された貞子から清子へ批判の手紙が届く。↓⑥五月十四日、清子から返信する。といういきさつである。

その後、どのようないきさつがあつたかわからないが、「黄薔薇」から貞子の作品は消えることになる。しかし、ふたりの交流はつづいていくことがこのあといくつかの書簡からも伺える。

「貴方におこられたことも私としてはよく反省して居ります「あやまちはくりかえしません」とはこのことです。」（昭和43年8月7日永瀬清子より栗原貞子宛書簡抜粋）

栗原さんの平和活動に准えた一言である。清子がこのように普段どおりのユーモアを交えていることから二人の和解が微笑ましいものであつたのではないかということが推測される。一方、栗原さんから清子への書簡が残っていないことが残念であるが、そのことがまた栗原さんへの関心を高くさせる。清子に比べて硬いイメージのある栗原さんだが、実際のところはどうかであつたか。そういうひとほど失敗談が微笑ましい場

合もあるのだ。「黄薔薇62号」で生じた問題はどのように解決したのであろうか。今後、書簡、交友関係などの肉声を拾い集めながらさらなる栗原さんの素顔に触れたい。  
なお、この後「黒色銀河」は二〇〇五年七月二日発行『栗原貞子全詩篇』に改作され収録された。

【参考文献】 詩誌「黄薔薇58号」 黄薔薇社（昭和四十一年五月一日）

詩誌「黄薔薇59号」 黄薔薇社（昭和四十一年十一月一日）

詩誌「黄薔薇60号」 黄薔薇社（昭和四十二年五月一日）

詩誌「黄薔薇61号」 黄薔薇社（昭和四十二年十一月一日）

詩誌「黄薔薇62号」 黄薔薇社（昭和四十三年五月一日）

栗原貞子宛書簡

栗原貞子著『私は広島を証言する』

栗原貞子著『栗原貞子全詩編』土曜日術出版販売（二〇〇五年七月二日）

「詩人 永瀬清子の生涯」熊山町（平成十年三月発行）

### 三宅圭子（みやけ・けいこ）

広島女学院大学大学院言語文化研究科日本言語文化専攻 博士課程前期修了  
著書『手に入らない幸せ』『錆色の時代に誇ること』など

二〇〇八年 倉敷市民文芸「詩」部門大賞受賞

二〇〇九年 岡山市デジタルミュージアムにて詩作品展示

現在 専門学校慶子アカデミージャパン専任講師、岡山理科大学非常勤講師

## 生ましめんかな

こわれたビルディングの地下室の夜だった。  
原子爆弾の負傷者たちは

ローソク一本ない暗い地下室を  
うずめて、いっばいだった。

生まぐさい血の匂い、死臭。

汗くさい人いきれ、うめきごえ

その中から不思議な声が聞こえて来た。

「赤ん坊が生まれる」と言うのだ。

この地獄の底のような地下室で

今、若い女が産気づいているのだ。

マツチ一本ないくらがりです

どうしたらいいのだろう

人々は自分の痛みを忘れて気づかった。

と、「私が産婆です、私が産ませましょう」と

と言ったのは

さつきまでうめいていた重傷者だ。

かくてくらがりの地獄の底で

新しい生命は生まれた。

かくてあかつきを待たず産婆は

血まみれのまま死んだ。

生ましめんかな

生ましめんかな

己が命捨つとも

吉永小百合さんの朗読で有名な代表作「生ましめんかな」の  
初出は『中国文化』創刊号（原子爆弾特集号 一九四六・三）  
に「生ましめん哉」―原子爆弾秘話―として掲載された。詩  
の中の地下室は千田町（現広島市中区）の旧郵便局の地下室。  
『栗原貞子全詩篇』（土曜美術社・〇五・七）には「生ましめん哉」  
を収録しているが、この冊子においては著者が現代表記に修  
正した「生ましめんかな」を掲載した。



三瓶山

かつて火を噴いていたあなたよ

今はうすみどりの山肌も

やわらかく

ゆるやかに裾を引き

見はるかす裾野の上に

しずもり給う

かつて火を噴きし故に

そのように美しく和（な）ぎ給うか

真向いてしみじみと

そのビロウドの感触を

仰ぎ見る三瓶山

高原の風は

涼をはらんでたえまなく

草木をそよがし

わが髪をなぶりてやまず

舞台

あらしは去り

津波はひき

広場に散らばる靴、ブラカード

旗 ひき裂かれたシャツ

その上を酷烈な太陽が輝き

舞台はすっかり変ってしまった

傷ついた人たちは

さざめく大都会の底で

重く降りた病室のカーテンのなかに

とび出た眼球を摘出し

折れた骨をつぎ

傷口を洗らい

砕かれた人間の怒りと苦痛を

厚く巻いた緋帯のなかに包んでいる

若ものたちは捕えられ

まだ耳朶の底にのこる

うたごえに耳を澄ましなが

翼を失った天使のように

不幸な主役のつづきを

法廷の被告席で

演じねばならないのだ

あらしは去り

津波はひき

広場の砂は

今日もひっそり静まっている

やがて日本の傷口が癒え

ふたたび うたごえが湧きおこり

旗がひるがえる日のために

広場の砂は

ずっとたえているのだ

## 挫折

わたしらはもう泉を

飲みほしてしまったのだ

涸れた泉のほとりに立って

渴きを訴えたとして何になるのだろうか

わたしらは渴きをいやすために集まって

一層深い渴きを知っただけだった

地下水はもうそこからは湧きはしない

ずっと深い暗らい地層のなかに

ひっそり水脈を保っているだろう

わたしらは渴きをいやし

よみがえるため

新しい泉をほろう

掘って深い泉の水を汲もう

## 時間

ビルの街を歩いていて  
ふと前方に城がそびえているのを見た

幻ではない

五層建

いらかの屋根の反りが

切紙細工のように

青い空を截っている

あれは遠い、昨日

原爆でやけてしまった筈だ

敗けたいくさと一層に

亡びてしまった筈だ

お濠の枯れ蓮の底にも炎はしずもり

あの日の死者たちは眠っているだろう

あれはいつのまに建ったのだろう

血と炎を沈殿させた

ビルの街に

同じ時間を所有しているのだ

ほんとににあったことか

なかったことか

あれは遠い神話だったのか

ハニワに型どった慰霊碑

はしばみの生いしげる

ドームの廃墟

死の影の消えてしまった石段

わたしは城の近くを歩いていて

前の世のくらがりのなかから

群なして呼びかける声をきいた

## 暗らい海

まだ光を知らぬ

小さな藻のような生命は  
春の日向水のように暖く

暗らい海なかに

勾玉のようにうずくまり

形のさだまらぬ夢を見ているのだろう。

寒天のようにぴらぴらの

小さな塊りは

いつのまにか人間の型を型どり

夜と昼のある世界へ生まれて来るのだ。

そして昼間は明るい光のなかで

あふ あふ溺れそうになりながら

夜は暗らい海で見た夢のつづきを

夢見るのだろう。

人間にとって昼間よりも

夜が親しいと言うわけは

生まれる前

暗らい海で長いこと眠っていたからだろうか。

母親と言うものは誰でも

暗らい海を内蔵しているのだ。

六一・一・二五

## 蝶

舞台では

ライトを浴びた蝶が

きらきら光る鱗粉を

散らしながら舞っていた。

アフリカの大沙漠の砂嵐のなかから

火焰花が火の色に燃える

セイロンから

宇宙船に沸くモスクワから

ヨーロッパの国々から

蝶たちは

血綿のようなさるすべりの咲く

ひろしまに

ひらひらひらひら

色鮮やかな羽をひらめかしながら

飛んで来た。

ニューメキシコの沙漠のなかでは

鉛でつくった窓のない工場で

鉛の作業着に包まれた人たちが

マジックハンドで作業していると言う。

その国からも

蝶は紅の羽根をひらひらさせてやつて来た。

わたしらは羽根を焼かれた蝶。

羽を焼かれた蝶は光に群れて

ひらひら舞うことは出来ない。

焼かれた羽をひきずって

ざらざら熱した砂の上を

虫のように這って生きねばならぬ。

皮膚に焼けつくあつさのなかで

鱗粉のようにきらきら色あざやかに

輝くものを

たしかめねばならない。

## こえ

その日、

生きのこった人々は

いろとりどりの夏の花と

線香をその前に供え

あの日の悲しみをつみ重ねるように

花と線香の山をつくった。

焙るような光のなかで

香煙は碑をつつみ

人らは目をとじてぬかずいた

その夜、

広場では大集会が始まつて

「あやまちはくりかえしません」

「あやまちはくりかえさせません」と  
誓ったとき、

アーチ型の屋根が赤く映え

そのなかにしずもる石棺も

真赤に灼熱していた。

いぶりつづけていた線香が

瞬間明るく燃えあがり

碑の内部をうつす時、

私は赤く焼けた内壁のうち

炎の中にうごめいている無数の人らの  
こえをきいた。

あの時、

水、水水と水を求めていた人々は

今、何を求めているのだろう。

生きのこった私らは

あやまちをくりかえさせぬために

何を言えばよい

あやまちをくりかえさせぬため

何をすればよい

## 雪の幻想

雪は　ひと晩のうちに

世界を白く蔽つてしまひ

野には

白くふちどりした十字架のような

裸木が立っているだけです

どこかで飢えた巨鳥の

不吉な声がきこえてくるのです

雪がこんなにふりつもったのは

あまりおびただしい血が

地上に流されたので

それを蔽うために

ふりつもったのかも知れないのです

やがて雪がとけて流れ出すとき

真昼の光のなかで

無数の焼けただれた死体が

現れてくるでしょう

白い雪の下に埋められた

わたしら死体を掘りおこし

わたしらをよみがえらせてください

雪がこんなに美しくもっているのは

その下に

無数の死がかくされているからです

## 抗議船フェニックス号

それはくらい二十世紀の船出

廃墟のなかの

ひろしまの祈り。

小さなヨットフェニックス号は家族五人と猫一匹で  
死の灰の降る海を

北国に向かって出帆する

それは二十世紀の垂訓

山上から降りたキリストは

今、船上の人となり

あの日死者たちで埋まった

広島海から船出する

折づるのレイをかけられて

はにかみながら手を振っている家族たち。

それは二十世紀の方舟（はこぶね）

終末の日の救済のため

北の海めざして出発する

平和の使徒フェニックス号に

あらしよ吹くな  
海よ 荒れるな。

六一・九・二〇

かつて自国に抗議しなくてはおれなかったように

死

暗やみの底を果てしなく  
降りたところ

白い骨が灌木のように茂り

冷たくもえる青い燐が

死の花のようにとろとろ光る。

くぼみや穴には

ぶよぶよにふくれた死者たちが

がらくたのように積みかさねてあった。

それはつい昨日のことのようでもある

生まれぬ前の世界のことのようでもあるが

つまりは

わたしの生の行きつくところだ。

息がつまりそうに冷たく暗らい

わたしはそこへ行かねばならぬ

愛するものたちとお別れし

光や風や花々をも見おさめて

私は暗やみの底を

果てしなく下降してゆかねばならぬ。

冷たく くらい時間のない国へ。

六〇・一〇・三一

戦争

戦争に敗けて

男たちは前線からかえって来た。

けれど男たちは語らない



戦いの日のことを。

昏らい太陽の輝く下の血塗られた野のことを。

問えば暗らい顔をして口をつぐんでしまうのだ。

男たちはいつも後方に無惨な

風景を背負っている。

飢えた獣のように

傷ついてさまよい歩いた岩ばかりの山。

コンドルが頭上をかすめる

血色の赤土山。

大空をわたる黒い太陽。

或日その風景が前方から迫った時、

男たちは自分の影におびえる獣のように

大声で叫びながら突撃するだろう。

夕陽に銃剣をきらめかしながら

暗らい夜の底に陥ちて行くだろう。

## 橋

まいまいつむりのような

らせん状道路を のぼりつめると

真紅の虹が

青い空にせりあがり、

眼下は瀬戸の

青い早潮だ。

まいまいつむりのような

らせん状道路を

カーブをきりながら

遊覧バスが降りると

まいまいつむりの橋を支える

コンクリートの巨大な橋脚柱の列。

まるでローマの円柱の建物のような

重量感だ。

仰げばはるか天空高く

真紅の虹が春の光のなかに

かかっている。  
きやしゃで華やかな貴婦人のように  
装って――。

六二・三

瞼の奥の涙腺に  
鉄線が通されるとき  
私は閉塞した心に  
風穴を開けるような  
つらい快感にひたっていた。  
鼻柱がごんごんいたんで  
遠い海のように耳が鳴る

石

涙腺が閉塞して  
涙が目にとまっていくと  
心もたそがれどきのように  
ものがなしくうるんでくるのです。

手術台に仰向けにねて  
懐中電灯に照らされながら  
手術着の人の眼の中に  
私の眼がとらえられ

外がどんなに騒しかりうと  
ても動かぬ石。  
その石に鉄線を刺したなら  
暗らい血があふれるだろう。  
つらい挫折のときをくりかえし  
くらしい階段を降りたまま  
石になってしまった私。

わたしはわたしの心に  
風穴をあける  
つらい快感を  
さぐりもとめている

六二・五

## 秋

昼間から 眠っている老いた猫よ  
深々と褐色の毛におおわれ  
何の夢を見てねむっているのだ  
死のように深い眠りからさめても  
愛に飢えたもののように 私の膝の上に  
おずおずあがつてうずくまる  
猫よ 生きものはさみしいね  
秋は透きとおるようにさみしいね  
庭の鶏頭の茎も葉も燃えるように赤い秋  
失われた夏はもうかえつて来ないだろうね  
ふときおいだつて庭の樹にのぼり  
爪をといでいる猫よ  
私も思考の爪をといで  
透明な秋を生きよう

## 樹木

もうすべてを失ってしまったように  
枝も鳴らさず  
氷雨にうたれてゐる裸木よ。  
六月  
しなやかなみどりの葉を  
きらびやかにつづり  
湧きあがるこえに  
やさしく枝をゆすつていたお前。  
八月  
太陽は金色の炎を投げかけ  
旗は赤く燃えて行進した。  
お前はぎらつく砂に照り返えされ  
はげしく蒸発しながら  
道行く人らをいこわせた。

十月

太陽の狂熱がおさまると  
お前を装っていたものは  
褐色に変色し  
やがて渴いた音をたてて  
のこらず散ってしまった。

十二月

頭上を吹く風は暗らい虚空で  
猛獣のようにおらびながら  
お前の枝を引き裂いた。  
凍てついた空の底に  
星が青く光っている夜、  
お前は地底からこみあげてくる  
にがい樹液にたえながら  
引き裂かれたまま考える。

「わたしはもういちど新しい葉で  
みづくろうことが出来るだろうか」  
「わたしはもういちどはげしい  
太陽の収奪に抵抗出来るだろうか」  
六月の季節の中で

八月の季節の中で  
生きのこった人らを  
みどりの葉陰の下で  
やさしくいこわせることが出来るだろうか

六二・一

わたしたち

眼から口から耳から炎を噴き出し  
燃えながら  
合掌している一人の僧。  
環になつてかこんでいる男も女も  
としよりもこどもも同じ炎の色に染まって合掌している

化学爆弾に焦げた樹木の  
黒いポロポロの葉が炎に照らし出され、  
稲田もいちめん黒くやけ果てた。

焼かれたことはあるが

自らを焼いて抵抗したことはない

いつも受身で

ずるずる引きずられて来てしまった

私たち。

今も日本列島に基地点々。

ベトナムの死臭をまきちらしながら

原子力潜水艦が入港し

飢えた日本のカラスが迎える

黒い船体。

徴兵カードを焼いたことがあったか

わたしたち。

天皇のために死んだことはあっても

いくさに反対して死んだことはない。

へいわ、

へいわ、

泡のように軽くとばされている日本の平和。  
その底深いところに

重く沈殿した死者たち。

黒い液汁のように焼かれた無人都市。

## 空

誰もいない午後の公園で

猿のように鉄棒にぶらさがり

さかさの風景を見ていました

一氣に何千万年を通過して

先祖がえりをした解放感です

私 キヤツ キヤツと啼いて見ましようか

猿に戦前も戦後もあるものですか

いつも頭上にかかっている鉛色の

空を足蹴にし 宙にさがって

見るさかさの風景と言うものは  
よいものです

頭を下方にすることはよいことです  
ひびわれた空を年じゅう頭の上  
にいたっているのは  
疲れます

六四・三・一二

黒い旅行鞆

—まだ見ぬ友に—

窓の景色はどこまで行っても  
乾からびた同じ灰色の景色です  
乗客もみんな  
あくびをかみしめながら　それでも  
「愛しているわ」と  
おうむのように

くりかえしているのです

網棚にのせた黒い旅行鞆のなかから  
私の青写真を取り出したなら

おうむたちは一斉に  
罵声を浴せるでしょう

すっかり退くつしてしまつた私は  
次の駅で下車します

私は私の未来図や星座や白い巻雲や  
花々の種子をいっぱいつめた

黒い旅行鞆をもつて  
一人で歩いて行きますわ

荒れ果てたこの街のどこかに  
あなたはまた生きている筈です

いいえ　あなたは  
まだ生まれていないかも知れない——  
それでもわたしは

この黒い旅行鞆の中の  
青写真を  
あなたにわたすため

見知らぬこの街に降りて来たのです

魔法使の鞆のように

ふくらんだ黒い鞆が合図です

街角で見つけたら

黙って受けとって

後を見ないで行って下さい

私もあとからゆっくり

つけて行きますわ

六四・三・三〇

太陽とひまわりが対話をして

うめく桜の街の人らの話

矩形の箱に重い死を

花に埋めて逝ったひと。

「生きたいよ 生きて証したいのよ」

と言ったひと

二十年前の炎の夏は

あなたのなかでじんじんもえた

失われた夏はかえって来ない

さるすべりの花が血色に咲いて

碑のある広場に鳩がとび

鐘がなりひびいても

あなたは来ない。

病んだあなたは

ケロイドの手をひろげたような

河のある街をさまよいながら

ボタンを押した指を追っていた。

折づるがひっそりしずまる

河畔の部屋で

失われた夏

失われた夏はかえって来ない

夏野の果てで

「生きたいのよ 生きてあかしたいのよ」と  
言ったひと。

あなたの生きたがった日々を

みんなが生きて

あなたを生かしたい

あなたを生かしたい。

六五・一〇・二〇

浅春

— 永瀬清子様に —

会合が終わって外へ出ると

運動場の鉄棒の向うに

菜種色のまるい月がほっかり出ていた

淡雪がちらちら

まだ底冷えはきびしいけれど

夕暮の空はもやのかかった水色だ。

あなたはオーバーのボタンを

はめ終ると

淡雪をてのひらにそっと受けとめた

わたしたちはかずかずの季節を

てのひらに重く受けとめて

つらい年輪を重ねて生きて来た。

暗らい飢えた季節がつづき

突然、空が裂け、火焰あらしが渦巻いて

河は垂直に流れ水柱を天に噴きあげた。

その時の年輪は黒い血で染めたように

今も鮮やかにのこっている

わたしたちはもう若い樹ではない

けれどもかずかずの年輪を重ねた樹は

高い梢にそれなりの

花を咲かせるものだ。

花の無い寒冷の季節にたえて

ふくいくと匂うものだ。



わたしはあなたのあとから  
自動車に乗り、  
あなたの隣に座った。

六六・二・五

ひだるい空が頭上にかかり  
渴いた空が頭上にかかり  
今も碑のなかから  
「水ヲ下サイ」  
「アア 水ヲ下サイ」  
とかぼそいこえがきこえて来る。

花幻の碑

赤く焼崩れた城壁の  
花崗岩は風化して  
はげ落ちた曼陀羅となりそれを背負って  
流人の墓のようにひっそり  
立っている碑  
石を投げられて月面のように荒れ  
もう詩銘もよみとれない

雨にうたれ  
雷の轟音と閃光に  
真二つに割られそうになった夜も  
昨日の出来ごとのように  
真新しい記憶を抱いて告知して来た。  
ふと、隊列を組んだ軍靴の音が  
きこえて来る  
営庭に出発を告げるラッパの音とする  
旧五師団司令部の跡  
カーキー色の幻想を払いのけ  
花の幻を追う石の人。

路傍に白いナズナの花が  
ひっそり群生していた。

ナズナの花をつんで供えると

流人のように孤独な人にふさわしい  
花だった。

手を合わせると流人の残党のように  
さみしい私だった。

六六・三・一五

それがあるから

不意にスモッグの密雲が裂け

ベトナムの黒く焼けた野や街が

まひる間の光に照し出されるのです

それは二十二年前

吹きとばされた広島の街でもあるのです  
焼け跡を泣きながら

歩いているベトナムの女やこどもは

私たちにそっくりの顔。

私はのめりそうになりながら

手を伸ばそうとしているのに

いつのまにか

ポリエチレン製の買物籠のなかで

行方不明になつてしまうのです

ツージェム寺院の若い尼僧は

ベトナムが骨と血で埋められ

ほろぼされようとしているとき

何も言えないで生きていることがつらいと

腕と膝を抱きしめて

炎になつて死にました

死ななくては言えなかったことを

わたしたちは生きて言うことが

出来るのです

ポリエチレン製の買物籠のなかで

行方不明にさせないで

その籠にあふれさせ

高らかにかがげましょう

何よりも美しいことば

おんなのことば

母の言葉

それがあるから

青い空の下に花が咲き

袖なしブラウスに小麦色の

腕が輝くのです

それがあるから

小鳥のようにこどもたちが

はずんだこえで明るく呼びあうのです

六七・六・二五（内藤純子へ）

## 黙示

一瞬天からひらめいた

三〇万度の熱線で

火刑にされた二十万の墓標

今も頭蓋に有刺鉄線の

荊冠をのせケロイドの壁面を

陽に照らされて佇っている

すべてもえがらになった死灰の街に

再びネオンの夜は深くなり

血ぬられた空からきこえる死者たちの

叫喚は 今も静まらず

小鳥たちはふき抜けの窓から出入して

死者たちのことばをつたえた

頭蓋の空を流れる

放射雲がにぶく光り

黙示のことばは

らせん階段から静かに降りて来る

六八・一・一五

## 無数のわたしとあなた

わたしらは

はげしく燃えて光りながら

無数のわたしになり

無数のあなたになって

際限なく爆発しつらなつて

世界をヒロシマにかえる

ナガサキ、サセボ、オキナワは

わたしらの骨肉

はげしく呼びあいながら

結びあい

逆噴射して光の洪水を

氾濫させる

その時黒くぬりつぶされた

スクリーンのなかから

焼かれた死者たちはたちあがり

みらいの樹立（こたち）に

花々をかざして

あなたやわたしに

やさしく呼びかける

わたしらは爆発し

よびあつて

無数のわたしになり

無数のあなたになって

世界をヒロシマにかえる

## 呼びさまされる

きらめく 夏の光をさけて

珊瑚樹の下で

ボアのようにみじろぎもせず

ねそべっていた白よ

パン屑をあたえると

とびかり

鋭い歯でがつがつ喰べる白よ

お前のどこにそんなはげしい飢が

ひそんでいたのか

お前がひたすらに満そうとするのを

見ている時

私もはげしい飢を感じる

でもそれはパンではない

私が生まれぬ以前から私が

もとめていたもの

お前の唾液のなかであまく溶けてゆく

パン屑のように

私も幼児のように

ひたすらに

飢を呼びさまされる

六八・三・一〇

## 女が夜叉になるとき

二十四才にもなっても結婚せぬ娘は

父や母の生活を見ていると 家は

日常の煉獄だと言う。

男たちは家族帝国主義の

権力を示すのに狂気になる。

おおマイホーム主義よ。

ままごとのねつ造された幻想よ。

亡くなつた母が私に話してきかせた。

冬の夜「出て行け」と言われてとび出し

暗らく凍てついた星空の下

樹立ちにひそむけものの遠吠えをききながら

山路を灯もともさず

挿していたかんざしを口にくわえ

夜叉のように殺気だつて歩いた。

自分の草履の音が後から追つて来て

衿足が冷たくなるが、

もと来た道にはかえられない。

もう遠く来てしまったのだ。  
峠をこすと小川があつて

黒い影絵のような水車小屋が  
ギイ ガタリ ギイ ガタリ と  
廻転し、心臓を凍らせる。

水車小屋の反対側の山上には  
火葬場があつて

幻想の亡霊が、行く手に現われる。  
すくむ足を一歩ずつ、息をつめて  
すすませた。

五里の山道をこえ

髪をおどろにふりみだし  
実家にたどりついたとき  
やっと夜が白みかけた。

母よ、やさしかった

あなたを思うとき いつもこの時の

あなたのことがつきささる。

女が夜叉になるときは

男の権力が狂気を発するときだ。

あなたの暗らい昔語りが、私の胸をしめつける。

そして 私が「黙れ 黙れ ものを言うな」と  
言われるとき

私の胸の中のやさしい花はしぼんで  
炎をふき出す怒りの花が開花する。

二十四才の娘は、

あなたや私ほど愚かでない代り

母でないから 母のもつ執念もなく

さらりとした ニヒリズムで

私の心の刃となる

六九・一〇・九 夜

## 蝶になる日は

近づくと

体躯をまるめて球状となり

砂粒にまぎれこんでしまつて

さがしてもさがしてもわからない  
暗らい地中深くひそんで  
根から喰いきって  
倒してしまふ根切り虫だ

明るい太陽の下で  
緑色の保護色で偽装し、  
頂上の新芽を喰いつくしてしまふ  
蕊喰い虫だ。

ある朝 眼がさめたら 私も  
一匹の虫に変身し  
剛い刺で武装して  
葉っぱの上にひっかかっていた。  
明るい太陽にさらされながら  
宙吊りになったまま  
白い蝶になる日を  
夢見ているか。  
羽化する日まで生きられるかどうか  
そのうち、夢見る蝶の幼虫たちといつしよに  
ガス状の霧の中にとじこめられ

夢と一緒に、やきつくされるかも知れぬ。  
それでも炎の色をした巨大な  
悪の華は  
咲かせてはならない。

六九・一一・六

## 突出するもの

子供をすてる藪はあつても  
わが身をすてる藪はない  
八幡の藪知らず  
迷いの藪  
迷い迷った地下茎がのびて  
軒下のコンクリートの床を  
破って、牛の角のような筍が生えた  
暗い地底に

ぬりこめられたいのちが  
いちずに光をもとめて

地上に突出したのだ

厳重に封鎖した皮の内部には  
やわらかい肉質の階段がある  
白い階段を昇り降りする

思考を秘め

地底にとじこめられたものが  
光の中に突出したのだ

#### 七一・四

死刑執行人のように残酷だった

死が窓からのぞいている病室を  
重い心に花束をのせて

見舞った

へ春になれば元気になれますわ

私らのいつわりを あなたは

きつと知っていたに ちがいない

やさしかったあなたは

私らのいつわりをいたわって

ほほえみながら うなずいた

今はことばを超えた世界へ

旅立ってしまったあなた

チョコレート色の内臓を 切開し

ピンセットで 腑わけする

外科医のように

現代の暗らい魂たちの

のたうつことばを

鋭いメスで ふわけして見せてくれた

あなたは もういない

ことばを超えた世界のあなたに  
――荏原肆夫氏を悼んで

予定された日が

遠くないことを知っていた私らは



ことばに　ほんろうされながら  
生きて行く　わたしらは  
暗らい地底の毛根のように  
もつれた　現代の呪文のなぞに  
ぶつつかるたびに  
あなたの明晰な眼を  
思い出すのです

七二・三・八

碑

薄暮の空に公園の  
噴水は白い焰をふきあげ  
鳩がむらがつて飛び交している。

こんな夕暮がいつかあったようで  
遠くない日の夕暮をさいごにかえつて  
来ないような不安な夕暮  
噴水の見える部屋で会議は  
自殺した詩人の詩碑について  
進められていた。  
詩人は生き残った人間の虚栄を  
笑っているだろう。  
“私を打て  
石をもつて打て。  
傷だらけの石碑こそ私にふさわしい  
更に打って音をたてて砕けたとき、  
私を打った人らはかすかな声を  
あげるだろう。  
再び青い光が閃いた時、  
人らの脳裡をふいに  
わたしの影がよぎるだろう。  
死の灰の降る気流の下  
たえず閃光におびえながら  
私は路傍に立ちつづけて来た。  
城壁の曼陀羅は風化した、

## 雨

壁の彼方にえがく曼陀羅は  
白い珊瑚樹をつみ重ねたような  
骨と血の海だ。

私はまだねむれない。

新緑の枝がさし交い

こんもりと私を包んでくれる場所で  
人知れずねむらせてくれ。”

七二・五・二二

あたりいちめん  
もやがたちこめて

川下の街は

深いもやにとざされたままだ

春の前ぶれだと言うけれど

日本列島は寒冷前線に包囲されたまま

国会は黒い霧事件にあけくれ

公害と不況と倒産と

もろもろの凶悪にべったり

はりつかれたまま

暗らい雨が降り続いている

七六・二・一八

時ならぬ春の出水は

中洲の枯葦原を水没させ

赤土色の流れをもりあげて

五日つづきの雨はまだ降りやまぬ

## 原爆断章

―ある画家の個展によせて―

## 廃墟のなかの教会

静まりかえった原子野に  
教会の壁だけが  
一枚の板のように立っていた  
神はどこへ行ってしまったのだろう  
祭壇は爆風に吹きとばされ  
こなごなになってしまった  
けれど 耳を澄ますと  
廃墟の空で無言歌が流れていた

## 原子野

黒く焼け払われた  
見わたす限りの原子野に  
大通りが細い筋のように白く残っていた  
何もない  
何もない  
街も人も吹きとばされ  
焼け払われた原子野の上に  
太陽がメタルのように  
吊り下げられていた

## 雲

光り輝く極限の白だった  
赤い炎と黒煙と碧落の  
抜けるような空だった  
いや 薔薇色に光る雲の柱だった  
いや虹の色に光って  
魂を奪われるように美しかった  
いや真黒のむくむく  
ふくれあがる巨大な  
きこ雲だった  
ときと ところで  
人びとは それぞれの 雲を見た  
雲の下で  
街は吹きとばされ  
川は死体で埋まった

## 両極

抽象とは こどものように  
単純だ  
けれども 世界を内蔵した

極限の相である

こどもはクレヨンで

抽象画のような稚い絵を描く

けがれを知らぬ瞳には

抽象的に直観されるのだろう

両極は相ひとしい

## 画家と母

絵の売れない画家は

描きためた画の

個展をひらくため

九十才の老母から金をせびった

母は何とかなしくやさしいのだろう

絵の売れない老いた画家はかなしい

売れるあてもなく

絵の具代に苦勞し

ひたすら己れのオリジナルファンタジイを

信じて耐えているのに

会場に人影のない日もじつと耐えて待っているのだ

## あなたの小さな手を

—眞理子へ—

あなたの小さな手を

誰が裁くことが出来よう

あなたは母さん思いの

やさしい子

おそいかかるあらしを

小さな体で引き受けて

母さんを守った

あなたの小さな手を

誰が裁くことができよう

くるしい時

さみしい時

その手をじつとみつめ

父さんをのりこえて

生きてほしいのです

あなたの小さな手を

誰がさばくことができよう

## 言って下さい ひとりのひとに

詩人Yよ

一人の死を無視するのをにくむ  
あなたは何故問わないのです

「広島市民には気の毒だが  
戦争中のことでやむを得なかった」

原爆投下をゆるし

ヒロシマの一人一人の死を無視する

ひとりの人をなぜ問わないのです

ひとりの人のために

一億に死ねよと言った人たちを

なぜ問わないのです

自らの名において死を強要し

中国大陸はもとより

北はアリユーションから南はブーゲンビル  
ガダルカナルの果

日本中の都市の空襲やヒロシマナガサキの

三〇〇万と天皇の軍隊が虐殺した  
アジアの二〇〇〇万の屍死の上で

日々セレモニイをくりかえし

「あつ そろ」というセリフを

三十八年間言つて過した人がいる

詩人Yよ なぜあなたはこの人を問わないのです

一人の死を無視したから

三〇万を無視し

三〇〇万を無視し

二千万を無視したのです

十五年間殺したひとりひとりを

返して下さい

私たちといっしょに

その人にそう言つて下さい

数のヒロシマをにくむと言った

そのことを

数えきれない人を犠牲にした

ひとりの人に言つて下さい

## 夕暮のように萎えて

川面にはすきまなくH型の鋼鉄の柱がうちこまれ  
H鋼の柱の間に川の水が青黒くよどんでいる  
その上に鋼鉄の床が

張りめぐらされた川下と川上の二つ橋の間をつたつて何台も

起重機がキリンのように首をのばし  
斜線の光で曇天を突きさして

剛板の柱が打ちこまれるたびに  
川沿いの家は暴力的な振動にふるえ

めりめり音をたててゆらいだ  
コンクリートの壁やタイルが陥ち、亀裂が出来た。

川沿いの竹やぶや畑は消えてなくなり

つくしやすみを摘んだ川土手は青草一本のこさず  
鋼板で砂止めされている

五米の道路が新設され  
二つの橋が架け変えられるのである

H鋼の棒の間に黒くよどんだ水がたまっている

新しい道路をトラックや乗用車が  
絶間なく走って

騒音と排気ガスをまきちらすだろう  
経済大国と言う暴力は

日本列島の隅々までみどりを奪い  
自動車道路をつくり

河岸をコンクリートで固め  
人間は排気ガスを吸って

夕暮のように哀しく萎えて  
生きねばならない

## 喪失か回復か

喪失か 回復か 奪還か

戦後ひたすら走りつづけた日々

うたごえがひびき 旗がひるがえった広場

仲間と腕をくみ 歌って前へ進んだ

時に敗北感にさいなまれ

お互いに傷をなめあつた日もあつた

湾岸戦争後の急展開に

急上昇し 追いつづけて来たが

失速して墜落してしまった

何があつてもストップはからなかったのに

連続する脅迫状や脅迫電話にも

屈しなかったのに

老いと病に空洞が出来てしまった内部

放電してしまった後のむなしさ

私をとりもどすために

私はゆっくり呼吸し

空洞を埋めねばならない

みなぎる力を待たねばならない

何かに憑かれたように走りつづけた私は

燃えつきたものをとりもどすまで

私一人の時間が必要だ

どんな誘いにも 私は動かない

九三・二・六

## 遠いこえ (一)

耳をすませば

遠くからきこえてくる呼びこえ

わたしゆき子

天皇の軍隊につけられた名前なの

ほんとうの名前は恥しくて名乗れないわ

敗戦で逃走する軍に海の中へ捨てられたから

ずっと塩からい水にさらされているの

あれからずっと恨の歌をうたい続けて来たわ

あれから五十年近く経ち

凌辱された肉体は白い骨だけになり

眼窩のなかから海草が生えて

ゆらめいているの

日の丸のひるがえる慰安所で過した日

男たちは血まみれの手で私を抱き

血まみれの罪を私の体の奥深く

射精したわ

同じ運命の姉妹たちはどこへ行つたのだろう

ふるさとへ辿りついた姉妹がいるかしら

おねがい 私をみつけて下さい

骨だけになつてもふるさとへかえりたい

私の青春をかえして

私の人間を返して

あれから朝鮮戦争やベトナム戦争の

特需景気で肥えたり

世界の経済大国になつた日本

大国にふさわしいリーダーシップのため

モノやカネだけでなく

血を流して貢献せよと言われ

チャンスとばかり海外派兵した日本

日の丸の旗のひるがえる慰安所に

アジアの姉妹たちが集められ

再び凌辱されることはないのか

骨だけになつた私は海の中から

じつと見ているわ

九三・一一・一八



## 生ましめんかな〈栗原貞子記念平和文庫〉開設記念

2009年7月10日発行

〔発行〕 学校法人広島女学院

〔編集〕 栗原貞子記念平和文庫運営委員会

委員長・黒瀬真一郎

〒732-0063 広島市東区牛田東 4-13-1

Tel 082-228-0386 fax 082-227-4502

編集協力 伊藤真理子・岡部哲博・池田正彦

印刷・製本 とき印刷

「生ましめんかな」「ヒロシマというとき」などの詩で有名な広島の人・栗原貞子さんの文学資料が、長女・栗原真理子さんから学校法人広島女学院に寄贈され、広島女学院大学の図書館内に「栗原貞子記念平和文庫」を開設した。

寄贈された資料はダンボール箱160箱で、その内容は多岐にわたり、蔵書・書籍1980冊（自著を含む）、雑誌類2632冊（戦後編集発行に直接携わった『中国文化』全号を含む）、反核・平和・環境団体発行の機関誌・パンフレット類48種類など大半は開架で収蔵。

ほかに、肉筆原稿204点、肉筆ノート・メモ132点、寄贈原稿類26点、書簡（ダンボール8箱分、点数未確認）、写真50点、関連新聞307部（戦後発行に携わった「平民新聞」「広島生活新聞」など）、新聞スクラップ類（ダンボール30箱分）などを開架で収蔵。

---

〔交通案内〕 ①②共・広電バス

① 江波発（八丁堀・紙屋町経由）…牛田早稲田行き・女学院大学前下車

② 大学病院発（広島駅新幹線口経由）…牛田早稲田行き・女学院大学前下車



栗原貞子（くりはら・さだこ）

詩人。1913年、広島市（可部）に生まれる。45年、被爆。代表作「生ましめんかな」は、この被爆体験をふまえて書かれた。46年『中国文化』原子爆弾特集号を編集（82年復刻）、46年、詩歌集『黒い卵』を刊行（検閲で詩3編、短歌11首が削除される）。著書に『ときゆめんとヒロシマ』（社会新報）、『ヒロシマの原風景を抱いて』（未来社）、『核・天皇・被爆者』（核時代に生きる）（三一書房）、『栗原貞子詩集』『栗原貞子全詩篇』（土曜美術社）、詩集『未来はここから始まる』『核時代の童話』（詩集刊行の会）など多数。2005年3月没。